Listen!!

soir

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｉｓｔｅｎ！！

【Ｎコード】
Ｎ８５０３Ｗ

【作者名】
ｓｏｉｒ

【あらすじ】
主人公の女の子がヘタレな男の子に振り回されるお話です。

・・・期待してもいいですか？（前書き）

５割ぐらいは実体験ですｗｗｗ
告白したとかプレゼントもらったとかは実体験だけどそれ以外はフィクションです。

・・・期待してもいいですか？

この想いはいつ届くのかな・・・？

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

秋は嫌だ。なんとなく人肌が恋しくなるから。
寂しいけど「寂しい」って言える人がいないんだよね・・・。
帰り道。いつもは部活の子と一緒に帰るけど、今日は彼氏と帰ってしまって私はひとりぼっちなのさ。
余計に寂しさが増すばかり。今日は私の誕生日っていうのに神様は不公平だね。

「ボーっと歩いてると事故るぞ」
「・・・荒木？」
「おう」
なんで話しかけてくるねん。
荒木はとなりのクラスの男子で、私の初恋の人。
ちょうど一年前に私から告白したけど振られた。それ以来しゃべったことないのに・・・。
「いいじゃん。私だって考え事するもんね」
「ふーん」
なんだし。用事がないなら即刻立ち去れ！！余計に寂しさが増すから。
「あのさ、一緒に帰ってもいいか？」

「え？」
「いやなら別にいいが」
「全然いやじゃないから！！帰ろっ」
顔が赤くなっているのがばれませんよーにと思いながら私たちは一緒に校門を出た。
あたりが暗くなっているからはっきりとは見えなかったけど、荒木の顔が少し赤かったような…。

私はまだ荒木のことが好きだ。はっきりいえる。
振られたのに馬鹿じゃないって自分でも思うけどやっぱり好きなんだからしょうがない。

それから駅に着くまで私たちは他愛の無い話をした。部活のこと、クラスのこと、趣味のことなどなど・・・。
いつもは長く感じられる道が、今日は短かくなってしまったようで不思議だった。
今日だけ道を長くしてください、神様。

信号待ちをしているときにいきなり話題が変わった。
「俺さ、意味のない出会いってないと思うんだよね」
「なんで？」
つかいきなり深そうな話してこないでよ。
「お前さ、世界の人口がどれくらいだか知っているか？」
「６０億ぐらい？」
「まぁ正解だな。６８億人いるんだって」

「そんなに！？」
信号が青に変わったので歩き出した。
「そんなかから特定の人に出会うんだから、何か意味があるんじゃないかと思うんだ」
「・・・んじゃあ私たちの出会いも何か意味があるのかなぁ？」
「かもな」
そうして荒木は黙り込んでしまった。
何か気を利かせたことでも言ってあげたほうがいいのかもしれないけど、私にはできなかった。

途中でいろんな人にすれ違ったけどジロジロ見られた感じがした。
お願いだから、勘違いしないでほしい。

駅の階段を上り始めるとちょっぴり寂しくなってきた。最初は恥ずかしくてたまらなかったけど、
時間がたつにつれて嬉しく感じられたから。
あぁ時間が止まっちゃえばいいのに。
神様、時間を止めてください。

「荒木ってくだりだっけ？」
「うん。お前のぼりだろ？」
「そうだよ。電車くるまでここで待っていようっか」
近くのベンチにある程度の間隔を空けて腰掛けた。
ぱっと見た感じではカップルに見えるような・・・。

「そういえばお前今日、誕生日だろ？」
「へ？覚えてたの？」
「うん。だからこれやるよ。」
学ランのポケットからごそごそと何かを取り出した。普通学ランのポケットから出すか！？
「たいしたもんじゃないけど。やる」
渡されたのはクローバーのネックレス。
「ありがとう。」
突然のことにただただ私は驚いてばかり。
「せっかくだし、つけてやるよ。」
「助かるわ～。こういうのあんまりしないから付けなれてないんだよね～。」
そういって背中を荒木の背中に向けた。

「ほらよ。やっぱり似合ってる。よかった。」
「本当にありがとう。」
嬉しいけど、つらい。「似合ってる」なんて卑怯だ。残酷だ。ヘタレ！！
「たいしたものじゃないから。そんな感謝される理由もないし」
「でもなんでくれたの？いきなりすぎるでしょ」
ちょっぴり期待を込めて言ってみた。
「えっと・・・。」
「何？」
「…っ」
と口を開きかけた瞬間
『まもなく一番線に・・・』
上手い具合に電車が来るアナウンスが流れてきた。
「あっそろそろ電車くるから。んじゃ。」
戸惑う私から、荒木は逃げるように去っていった。

「なんでくれたんだし。」
ネックレスにそっと触れてぼそっとつぶやく。
嬉しい反面、荒木の気持ちがわからなくて不安になった。
一体荒木は私のことをどう思っているの？
期待してもいいですか、私？

先客は・・・

結局昨日は全然眠れなかった。嬉しすぎて目がぱっちりというのもあるけど、荒木がヘタレすぎて悩まされたからだ。その気がないなら優しくしないでよ。恋しくなっちゃうでしょ、バカタレ。

「おはよー美香ちゃん。」
「おはよ。珠洲。」
珠洲は私の幼馴染で小学校から高校までずっと同じところに通っている。幼馴染というより姉妹に近いかもしれない、それぐらい大切な人。いつも私たちは珠洲の家の前で待ち合わせをして学校にいっていて、それは変わることの無いいつもの習慣だ。

「美香ちゃん、クマすごいけど大丈夫？」
心配そうに聞いてくる。
「だっ・・・大丈夫だから。パソコン夜までいじっていたらこんなことになっちゃってさ。あはははは。」
とっさに嘘をつく。だってこの悩みごと、人に言える分けないじゃん、恥ずかしくて。
「あやしーい。なんか隠してない？」
・・・さすが珠洲。
「・・・ごめん、今はそれについて話したくないの。」
「そっか～。まぁそういうこともあるよね。いつでも相談に乗るから大丈夫だよ。」
「ありがとー。珠洲大好き！！」

「私もだよ。美香ちゃん大好き。」
ふたりで笑いあった。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

授業の終わりを告げるベルが響き渡る。すぐに私はかばんに必要最低限の教科書を詰め込むと教室を出て生徒会室に向かった。実は私、生徒会長をやっている。だからちょくちょく生徒会室に行って仕事をしているのだ。
生徒会室は部室棟の最上階の一番奥という最悪な立地条件の場所にある。教室から一番遠い場所にあるんだよ畜生。校舎と部室棟を結ぶ渡り廊下を渡り、むだに段数がある階段を駆け上り、ガラガラと開けづらいドアを開けると生徒会室に到着だ。
生徒会は各学年４人ずつで構成されている。まぁ三年は夏前には引退してしまうけど。ということで今は８人で運営している。

８人で運営している割には生徒会室の面積が広すぎると思う。だってＨＲの教室と同じ広さなんだよ。しかもなぜか湯沸しポットや包丁、まな板もあるしね。
「・・・誰だよパソコンのスイッチ入れっぱなしにしたの。」
横長の机にある2台のパソコンのうちの片方がつけっぱなしだった。ついでにこの生徒会室にはめったに人がこない、というのも役員みんないそがしいからだ。それなのにパソコンの電源が入っているのは不自然だ。
「誰か先に来てたのかな？」
あたりを見渡すと机の下に誰かのバックが置いてあった。見覚えがある。
「誰のだっけ？」
バックの中身を見るのは気が引けたので電車の定期の名前を見てみると・・・。

「荒木淳」

その瞬間ドアが開いて荒木が入ってきた。

すれ違い

「あ・・・」
荒木がつぶやいた。そりゃあびっくりするよね。しかも昨日の今日だしね。
「よっ。」
この気まずい雰囲気をどうにかするためにとりあえず、きさくにあいさつをしてみた。

「よお、びびらせんなよ」
そういってドアを閉めて、近くの椅子を寄せて私のそばに座った。
ってか荒木君、ドア閉めたら後で誤解されるかもよ？わざとか、それとも天然なのか？
それをあえて口にしない私もどうかしてるかもね。

「こっちこそびびらせないでよ～。そういえば何しにきたの？」
「生徒総会でさ、会計報告するじゃん。だからそれを作りにきた」
ついでに荒木も生徒会に所属していて、会計を担当している。
「もうそんな季節か・・・」
「今からいろいろ考えておかないと、新聞部に叩かれるぞ～」
「やばっ！去年の会長、めちゃくちゃ叩かれてたよね」
毎年のように生徒総会では新聞部と生徒会による激しいバトルが展開されるのがお約束になっている。
「俺のクラスに新聞部の部長いるけど、めちゃくちゃ性格悪いって評判だぞ」
「世の中にはめんどくさいのがいるのねー」
「つか、俺忙しいから話しかけるな。お前も仕事しなっ」
そしてパソコンに向かった。私は荒木から離れた机で仕事をし始めた。

昨日の今日の割にはいつもどおりしゃべれたので少し安心した。
でも、やはり昨日の言いかけた言葉が気になって仕方が無い。
本当にヘタレだなぁ～。もどかしいヤツだって知ってるし、こんなヤツに惚れたって無駄ってことも分かっているけど、やっぱり好きなんだよね。・・・馬鹿だな私。

＊＊＊　＊＊＊　　＊＊＊　＊＊＊

＊＊＊　＊＊＊

仕事が終わって時計をみると5時だった。外はもう薄暗くなっている。
「もう帰らなくちゃ～」
ふと荒木を見ると寝ていた、キーボードが顔をめり込ませて。痛くないのか？
一瞬、起こそうかな？と思ったけど、私の理性がそれを止めた。なぜなら、

荒木を起こす
←
時間的に一緒に帰ることになる
←
昨日の二の舞になりそう

「よし、帰るか」
こうして私はバックに荷物を即効ぶち込み、とっととこの部屋から出ようとしたが
「ちょっとくらい、いいよね？」
と荒木の髪の毛をそっと撫でてみた。思いのほかやわらかかった。

ついでに寝顔も見てみたけど、かわいかったね。無防備すぎる。
「やっぱり、あんたのこと好きだわ」
そしてできるだけ足音を立てずに、部屋から出て行った。

＊＊＊　＊＊＊　　＊＊＊　＊＊＊

一人の少女が部屋を出て行ったとき
一人の少年が目を覚ました。

「何を今更言ってんだし。俺だってお前のこと、好きだ」

作戦会議（前書き）

次の話は、明日の１５時に予約しましたー。
よかったら読んでみてください。

作戦会議

生徒総会も無事終わり、今年も残りわずかになってきた。
まさに「光陰矢のごとし」だなぁと思う今日この頃。

結局荒木とは何の進展も無いまま。学校の廊下ですれ違ってもお互い目を合わせようとしない。生徒会でも必要最低限のことしかしゃべらない。なんだかこのまま終わってしまうのもいやだなぁと思うが、何をすればいいのか分からなくて・・・。

「あー、もうどうしよう・・・。」
昼休みになったときの第一声。４時間目の数学の授業内容を耳に入れないで、ずーっと荒木のことについて考えていた。うん、やっぱり恋は人を狂わす。
「また荒木君のことで悩んでいるの？」
私の前の席に座っている珠洲が、心配してくれる。・・・って話していないのに何で知ってるの？
「べ・・・別にあいつのことなんか・・・」
「図星ね。美香ちゃん分かりやすいよね。」
「ねー珠洲、助けてー。」
「別に助けるのはいいけど、結果がどうなっても知らないわよ」
「曖昧なのが一番イヤだから、お願い！！今度たい焼きおごってあげるから」
「いいわ。協力してあげる」
「ありがとー、珠洲！！」
珠洲はたい焼きが大好きだ。ほぼ毎日のようにたい焼きを食べているのに、モデル並みにスタイルがよろしい。神様は不公平だ。

「で、何かいい案あるの？」
期待を込めて私は聞く。
「あるわよ」
「教えてっ！！」
「一週間後、とてもビックなイベントがあります。さぁ、なんでしょうか？」
「・・・まさかクリスマス祭？」
「正解。」
クリスマス祭とは、我が校のクリスマスに催されるイベントで生徒会主催で行われる。ついでにこのイベントでは生徒会から支給されるちょっとしたもの（毎年支給されるものが違う）を好きな人に渡してリア充になってしまいましょうというイベントだ。しかしこのイベント、クリスマスの日の朝にわざわざ学校に集まってやるっていうのがめんどくさい。
「やっぱりそれしかないのか～。」
「だから美香ちゃんはそれまでになるべくいい印象をもってもらえるようにしなくちゃね。」
「例えば？」
「うーん。やっぱり挨拶するとか？」
基礎中の基礎って感じがする。もっとガンガンいってもいいのでは？
「だってさー、いきなりクッキー焼いてあげたりするのも変でしょ？」
確かにそうだ。明日は雹が降るとか言われかねない。
「あとは、さりげなーくクリスマス祭に誰にあげるとか聞くとか」
「それはちょっと・・・」
「まぁ、明日から頑張ってみて。」
「うん。頑張ってみる！！」

こうしてアプローチ大作戦が始まったのだった。

作戦開始

クリスマス祭まであと6日。
あと6日でもしかしたら私の望むような展開になるのかもしれない。
だから頑張ってアピールするのだ。頑張れ自分。

お、さっそく前方に荒木発見。今日はいつもより一本はやい電車に乗れたので荒木と同じ電車に乗れた。このチャンスを逃さないように、挨拶をしてみることにした。珠洲に「頑張れ」と言われて余計に頑張れる気がしてきた。
「おはよー」
なるべく、普通に自然な感じで挨拶をしてみた。
しかし荒木は私を少し見つめて視線をそらして、挨拶を返してくれない。
私はすぐに珠洲のところへ戻った。
「どうだった？」
「スルーされたんだけど・・・」
「へ？どうして」
「わからない」
どんどん荒木と私たちの距離は離れていく。
このまま、一生近づくことのないかもしれないと思うと怖い。

挨拶作戦は失敗に終わった。

そんなわけでショッキングすぎて授業も集中できずこっそりケータイをいじっていたら

いきなりメールがきて、驚いた。
「もー、びっくりするじゃん。」
とつぶやいて、差出人を確認すると
「荒木・・・！？」
震える手でメールを開く。もしかして朝のことかな？怒っていたら
どうしよう？と一瞬思って目を閉じたがメールを見たい気持ちには
勝てなかった。
メールの内容は単純だった。
『放課後、午後５時に生徒会室で。』

授業終了後、このメールをすぐに珠洲に見せた。
「もしかしたら、いい話かもよ」
「だったらいいけど・・・」
「絶対行ったほうがいいよ」
「分かった」

今日に限って時が過ぎていくのが遅く感じられる。
あぁ、放課後が待ち遠しい。

告白

帰りのＳＨＲが終わると同時に私はダッシュで生徒会室に向かった。
私が急いでいる様子を見て廊下ですれ違う人々が、わざわざ自分のために道をあけてくれるのでありがたかった。
走っている最中に、心臓が尋常じゃないぐらい速く動いていた。
速く走ったせいじゃないということはよくわかっている。
でもさ、しょうがないでしょ？はやる気持ちって抑えようがないし。

生徒会室には、もう荒木がいた。いすに腰掛けて、ぼんやりと外を見ていた。
なんだかその背中が悲しげに見え痛々しくて、声がかけづらかった。

しばらくすると、荒木は私がいるのに気づき、立ち上がった。
「おう・・・来たか」
「うん」
「いそがしいのに、ごめんな」
今の荒木には朝に感じたあの冷たさが見受けられなかった。
「大丈夫だから。それでさ、本題は？」
心臓のこの高鳴りが荒木まで聞こえてしまいそうで怖い。
はやく決着をつけたい、そしてこの場から去りたい。
「お前、ちょっとは落ち着けよ。あせりすぎだぞ」
「あせってないもん」
「ちゃんと気持ちを落ち着かせて、そしたら俺の言いたいことも分かると思うんだ」

そこで私は深呼吸を数回おこなった。ちょっとは落ち着いたかも？
「さぁ、話してくださいな」

荒木はしばらく真剣な顔をして黙り込んだが、口を開いた。
「俺さ、お前のこと好きなんだと思う。・・・恋愛対象として」
「！？」
「お前が俺のこと好いていてくれてるのも分かっている」
「なんで？」
「生徒総会前の生徒会室で、会ったときにお前が狸寝入りしている俺に向かって…」
「えっ・・・寝てなかったの？」
まさか、全部知ってるのか！？私がやったこと。
「悪かったな」
「まぁ確かに私もあんたのこと、好きだし」
また心拍数が上がってきている。
なんなんだろう。こんなこと経験したこと無いからすごく変。
でも、なんか好きな人と分かり合えるっていいね。

しかし、荒木は私の一言を聞いて顔をしかめた。
そして冷たくいいのけた。
「だからといって悪いが付き合うことはできない」
と。

その優しさが辛いの

「え？言っていることが矛盾してるよ？」
「矛盾してはいない。理にかなっている」
「荒木の言っていることの意味が分からないんだけど」

だってこの流れから「付き合いましょう」ってなるのが普通だと思うんですが。

「だから、お前のことが好きだから付き合えないの。分かるか？」
「何言っているの？」

荒木はじっとこちらを見つめてきた。
その目を見つめるのは怖くてたまらない。
だけど、私は逃げたくないので見つめ返した。

「俺は将来発展途上国に住んで、一人でも多くの人が生きていける社会を作るのに協力したい。そこで俺が死んでしまったらどうだ？」
「・・・」
答えられなかった。というか考えたくなかった。
「お前が俺の死で苦しむのも嫌だ」
「そうだけど・・・」
「俺はお前を絶対に絶望させたくない。だから付き合えない。言っていること分かるか？」
「うん・・・」

確かに理にかなっている。荒木が私のことを好いていてくれること

もすごく分かるし、
大切に想っていてくれることも分かる。でも、その優しさが辛いよ・・・。

いつの間にか頬に涙がつたっていた。

「ごめん・・・」
タオルをバックからだして必死に目を押さえるが止まらない。
「俺さ、いますぐお前のことを慰めてやりたい」
じゃあなぐさめてよ。
「でも俺が優しくしすぎたらお前、後で辛くなるだろ？だからもうこれ以上優しくしないから。お前はきっと俺よりいい人に巡り会える。だから俺のことは忘れろ。・・・いきなり言われても難しいだろうが」

私はただ泣く事しかできなかった。

それから1時間私は椅子に腰掛けてずっと泣いた。
荒木は無言で私のそばにいてくれた。

夕日が沈むころになって荒木が口を開いた。
「落ち着いたか？」
「ちょっとだけ」
泣きすぎてかすれた、小さな声しかでない。
「ごめんな。今更何を言っているんだろうな、俺」
そして顔を伏せた。
なんでこんなヘタレな男にホレたんだろう、私。
でも、後悔はしない。
「そんなことないよ。頑張ってその夢を実現してね」
「・・・おう」

私は立ち上がってバックを持ち
「バイバイ」
小さく手を振ってそして
「ありがとう、大好き」
って言って出て行った。

じゃあね

私はそのまま教室に行った。
やっぱり珠洲は待っててくれた。

「珠洲。おまたせ」
珠洲は自分の席で勉強していた。

「美香ちゃん・・・」
私の顔を見て心配そうな顔をした。
泣いたせいでまだ目が腫れていたのだろう。
「フラれちゃった。あは」
まだ泣きそうだけど、無理やり笑った。
友達の前では泣きたくない。

「無理しないで・・・」
そして私をそっと抱きしめた。
珠洲のぬくもりで、私の凍てついた心が溶け出した。
涙が止まらない。

「でも、私は後悔してないよ。珠洲」
「なんで？」
「私ね、初めて本気で人を好きになれたから。なんでそのことを後悔するの？絶対そんなことはしたくないもん」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8503w/

Listen!!

2011年12月17日22時52分発行